

お母さん

地主愛子

なぜ僕を生んだんですか

— 少年期の
魂の記録



青春出版社

お母さん
なぜ僕を生んだんですか

——少年期の魂の記録

地主愛子

青春出版社



お母さん
なぜ僕を生んだんですか——少年期の魂の記録

昭和四十六年四月十五日 第一刷
昭和五十四年七月二十五日 第五十一刷

著者 地主 愛子
発行者 小澤 和一

発行所 株式会社 青春出版社

〒162 東京都新宿区若松町73番地

振替東京九一九八六〇二番

TEL(203)五二二一〇三〇

検印を廃す

★この本をお読みになったご意見ご感想を編集部までお寄せ頂ければ幸いです。

印刷・深志印刷 製本・ナショナル製本

0000-204504-3822





〈日絵撮影・福田勝士〉

相談室での筆者

子供の瞳を、いつもまっすぐ見られる親でありたい。

——その愛を、子供の求めるとき与えず、あとで気がつき追いかけても、子供は親の元へそうやすやすとは帰ってこないのだから……。

まえがき——母の眼、子の眼

我が子が毎日元気に両親のそばにいる、これ以上のしあわせがありませんか。ところが、その幸福に馴れて私どもは、子供の健康に感謝することを忘れ、それ以上の要求を子供にかけてしまします。

良い成績で有名校へ進学させたい。有名大学から一流会社へ入社させたい。母親の欲望は、子供の年齢とともにポウ張する一方で、決してあきらめることはありません。というのもその思いが、世の母たちの生き甲斐なのですから。

母の生き甲斐が増すとともに、子供は段々不幸におちてゆきます。中学一、二年生頃までは、どうにか母をよろこばせたいと努力しても、それが中学三年、高校一年と肉体の発育とともに精神も成長し、両親を批判する眼ができてくると、長い間圧迫され、無視された怒り、憎悪が一気に吹きあげてくるのです。

この時、両親が反省し、親の権威をふりまわすことなく、心をうち開いて子供と話し合うことにやぶさかでないければ、子供が家を捨ててくともないと思えます。

すべての子供は、皆、お母さんを慕っています。その子供の切なる心を、いかに母親たちは母

の名に慢心して、無関心にふみにじり、忘れ果てていることでしよう。

澄み切った清らかな瞳で、母を仰ぎ見つめ、花びらのような唇に、母の乳房を求めたみどり子が、殺人、強盗と、人々から恐れ憎まれるようになったのは、少年をとりまく両親、環境の責任でこそあれ、少年自身は、まったく、不運の星のもとに生まれてきた、としか考えられません。

永い間、篤志面接委員という立場で、私は少年たちに接して参りましたが、それはあくまで表面的な形式であって、私自身は母の眼、母の心で少年に接してきました。

だから少年も、私の心を感じてか、なんでも包みかくすことなく訴えてくれました。少年の手記を読まれた方の中には「なんだ、自分の悪いことは棚に上げ、みんな社会や環境が悪いなんて罪の意識がなさすぎる。また著者も少年に甘すぎやしないか」と批判されるかも知れません。

実は私も最初の間はそうでした。裏切られ、利用されたことも度々でした。もう、自分の力ではこの子を救えない、と絶望したこともあります。けれども、もし私たちが、この少年たちをつきはなしたらどうなりましょう。

少年犯罪は、法律でどんなに罰しても、決してなくなることはありません。少年を罪から救い、正道にもどすことのできるのは、ただ、愛のみです。少年が心の底で求めつつづけているのは、母の愛なのです。

私は自分の生涯を、他人の子供たちに捧げているとは思っておりません。他人のために、では

なく、私自身のためです。なぜなら、この道しか私には生きる道がないからです。

面接委員を委嘱されて五年目、非行少年たちの悲しみを知っていたため、「とべない翼」という本を出したことがあります。しかし、そのときと現在とは、非行の原因も大きく変わり、犯罪も比較にならぬほど凶悪になっております。

私はふたたびこの問題を取りあげて、世に問う決心をしたのです。

本書の少年の手記は、二百名近い中から四十五名を選び、思いのままを書いてもらい、その中から、どここの家庭でも起りうるケースを十一篇選びました。文章が苦手でも、話すことは得意の子には数回面接を重ね、口述筆記など、この手記を完成させるまでに十カ月をついやしました。

相談室の報告も、百人近い相談者の中から紙面の都合上、わずかなケースにとどめました。我が家は理想的な教育をしている、問題などない、と思っている家庭こそ子供の側から見れば多くの問題があることを、相談は物語っています。

どうか、この本が日本中の子供たちに、明るい未来を呼ぶことができるように――、と、祈りをこめてまとめました。少年の手記については、吉野明少年院長に御協力頂きました。

なお、文中の登場人物、地名等すべて仮名を用いましたので御諒承頂きます。

昭和四十六年 仲春

地主 愛子

目次

I 僕はひとりぼっち

——純真な子ほどもろい

手記1 乳房への憧れ 14

父親の中の誤算

我が子に弱点を持つ親

手記2 おさえられない誘惑 22

こんな夫、こんな父

この人たちの会話

空虚

手記3 僕は心から母をうらみます 33

母親の影響は恐ろしい

手記4 いつもツイていない僕の人生 44

“愛のムチ”と憎しみ

II 僕が欲しいのは

——親から逃げだす“愛の誤算”

59

13

手記5 母のいのちに約束 60

親から逃げ出す子ら

手記6 仲間にバ力にされたくなかった 69

母の愛がかえって仇に

一生を支配するポイント

手記7 逃げだせなくなるシンナー遊び 76

小さい脳を痛めつけるシンナー

恐ろしさを知らない母親たち

自分を信じ込む愚かさ

Ⅲ 僕の気持ちが変わらないお母さん……………87

——突き落とす親のひと言

手記8 お前は捨て子だった 88

なぜ私を生んだんです

ショックになる言葉

手記9 二つの顔を持つ父 102

幼い日の悪の芽

決して口にしてはならない言葉

手記10 母はとうとう帰って来なかった 110

IV

大人はウソつき子供をだます

——身をもって知った真実

手記11 私の体から消えない言葉 120

素直にやどるよろこび

どん底に突き落とした交通事故

1 この少年たちとの出会い 128

私の中に生きる意志
母としての無意識が
心の美しい少年が殺人
だまされてもだまされても
その母たちの悲しみ

2 心と心の絆は強い 141

自分の意志をくたく運命
こみ上げてくる悲しさ
どうかMのためにこの道を
欺かれても信ずるが
捨てられ、そしていま
ぬぐわれぬあの烙印
自分で歩き出した少年

V この子の眼の中に

——悲しい少年の日の魂

1 痛めつけられ、追いつめられて 158

怒りは心の中で燃える

僕は気狂いなんかではない

この世に自分は一人しかない

2 信じられないうれしさ 165

母はいのちを捨てて

わが子を救えなかった牧師の父

十七歳の苦悩の魂

思いがけない一枚の葉書

父になった少年のよろこび

この子らへの自覚

こんな幸せな日が来ようとは

157

VI わが子をどこまで信じるか

——家庭の中の気ずかない要因

1 なぜ、ものを盗ったのだろうか 188

愚かな母の教育

信じることが生かすこと

187

VII お母さんだけが知らない

——わが子を失うまえに

2 どこにでもある落し穴 193

ふと眼がさめたら

誰に相談すればいいだろうか

3 なぜ暴力をふるうのだろうか 198

息子におびえる母親

親の中にある原因

1 親に言わない子どもの悩み 204

ヌード写真を見る小学生

犯罪の陰に家庭環境があった

2 自分しか信じられない少年 210

あのやさしそうな子が

気の弱そうな子が平然と

冷えきった心の少年

3 母親の中の盲点 217

わが子を不幸から守るために

やさしい子だと思っていたのに

行き場もなくなった子ら

4 非行少年はどんな家庭から

母をだましつづけたK子
最も多い普通の家庭
うちの子にかぎって

227

本原カット・小泉富司
章原カット・三田恭子

I
僕はひとりぼっち

——純真な子ほどもろい



乳房への憧れ

石川 洋一

(小学三年(中学三年))

私は東京の山の手で生まれた。

父の仕事については何も知りません。知ろうとしなかったのです。そのような私の消極的な面が、その性格が、現在ここにきた原因かもわかりません。

さきに書きましたように、物事に対して、なぜだろうか、どうしてだろうか、と疑問に思うことが小さい頃からありませんでした。よく叱り、又よくかわいがってくれる父と、父の母、つまり私にとって祖母の三人家族でした。

小学校から中学に入る頃まで、祖母を母だと思っていました。私はだれであろうと、盲目的な愛情をそそいでくれる人が私にとって大切な人だったのです。普通一般の子供が母に寄せる愛情を私は無意識のうちに祖母に寄せていました。